スリバチ

地形によってつながる日常の風景をつくる

私たちは、横浜市弘明寺町の谷戸地形に建つ空き家を賃貸し、シェアハウスをしながら、周囲一帯のスリバチ状の空間を「スリバチ」と名付け、この地形を舞台に活動しています。
自治会や地域組織との交流、空き家の改修やスリバチを使ったイベントを企画･運営しながら、スリバチならではの風景を作っています。スリバチの魅力、それは、囲まれた地形がもつ独特の安心感や居心地の良さ、そして異なる出来事を受け入れ、地形を媒介に一つの風景を作り出せること。
私たちは、この魅力を引き出しながら、地域に新しい風景と関わりの形を生み出していきたいと考えています。



スリバチ住民（私たち）

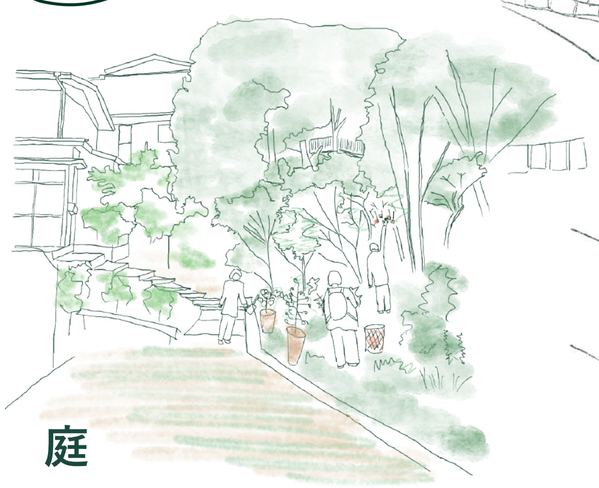
大学で建築を学んだ４人が空き家改修の可能性を見出すべく、２０２４年９月から住み始めた

キッチンを作り、家をまちに開く





空き家に住み始めた一歩目として、まず１階部分の改修に着手した。
キッチンと２部屋に別れていた部屋をひとつの空間に繋げ、キッチンカウンターを設けることで地域の人が集える空間として整備した。



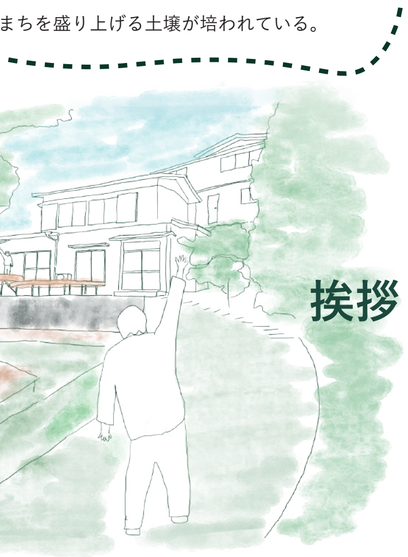
庭

かつての大家が隣接する庭に植えた草花は大家がいなくなっても地域住民に愛され、集まるきっかけになっている

周囲の住民



地域の自治会と繋がり、互いに助け合いながら活動を続けている



見晴らし台

急な坂を登ると、一気に景色が開ける場所がある。そこに仮設舞台を設置すれば、立ち止まってゆっくり景色を眺められる

地域のクリエイター



弘明寺にはかつてよりアーティストインレジデンスがあり、若いクリエイターが交流し、まちを盛り上げる土壌が培われている。

挨拶

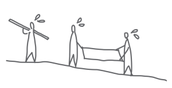
縁側を設置すると、公園を散歩している人と挨拶するようになった。スリバチに対して家が顔を持った瞬間だった。

地形に開いた縁側の制作




スリバチの地面と接するエリアで、人々が集える縁側を制作した。
コンクリート基板上に、地形の延長のように徐々にせり上がり、異なる素材の３段の床を設置した。





車での材料の搬入が困難なため、単管や木板を人力で運べるスケールで設計し、ホームセンターでプレカットしてから持ち込むことで少人数でも作れる計画とした。

イベント時にはスリバチから注目を浴びる舞台として、普段はスリバチ全体を見守る物見台として、その役割は状況に応じて即座に切り替わる



入り口

スリバチの玄関のような場所に２階建ての空き家がある。改修して２階には小さな図書館を、１階の塀を取り除いて座れるベンチにすれば井戸端会議の風景が生まれる

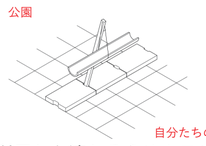
仮設的に公園をジャックする

■ 流しそうめんイベントの開催

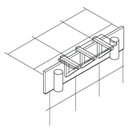





かつての住人が隣接する公園に草花を植え隣人をもてなしていたように、公園の地形を足がかりにした仮設物が活動の滲み出しを生み出す



▲側溝を利用した流しそうめんモジュール



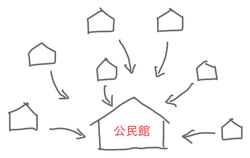
▲擁壁に腰掛けるための架構

スリバチ地形と連続した日常を作る

私たちがやること：スリバチの「囲われた公共的風景」を作る

小さな空間や居場所が点在し、それぞれがスリバチを通る人々とともに自らの風景を形作りながら、緩やかに連なる。町内会や自治組織のように義務感で結ばれる共同体が立ち行かなくなりつつある現状に対して、スリバチ地形を媒介とした小さな風景の連なりによって緩やかな共同性の構築を目指す。

制度が生み出す共同体



地形が生み出す共同体



手法：スリバチに点在する風景をつくる構造

ひとが手を「加え続ける」

スリバチに関わり続けることで、人が生活できる環境を維持すると共に、日常の風景を持続させる。



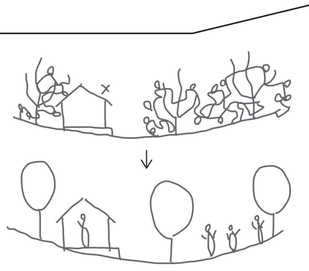
▲繁茂した蔦を伐採する



▲不要な残置物を解体する

居場所をのこす・つくる

放っておいたら再開発されてしまうこの地に住みつき、改修をすることで人の居場所のスケールを残し、人が滞在する契機をつくり、スリバチの風景に既存の建物が再編入する。



地形に対して「開いた形を作る」

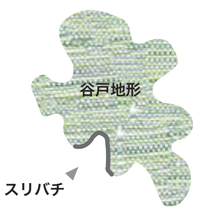
個々の空間が閉じずにスリバチ全体と関係を持てるように顔を持たせる設計をする






スリバチのこれまで

弘明寺町の「スリバチ」



スリバチには
・異なる出来事・空間をまとめ一つの風景を作る
・囲まれ感が安心感や居場所感を生む
・眺望が連続的に変化する
といった、地形によって生じる魅力が存在している

失われつつあるスリバチの風景



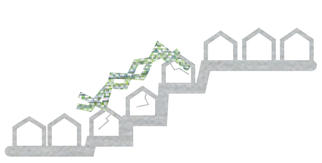
戦後、平坦であった谷戸上部と底部に宅地が広がった。

↓



増え続ける人口に応えるように、谷戸斜面部分が造成・宅地化され現在の姿になる。

↓



階段や坂道が多く生活に不便な谷戸地形では、高齢化とともに人口流出が進み、空き家が増加。
建物の老朽化や草木の繁茂により、人々が近寄りにくい空間に。

団体名：スリバチ
代表者名：木許順賀
メンバー：尾崎龍樹、山田伸希、菅野壮汰

Instagram